

送 辞

冬の寒さも通り過ぎ、木々は芽吹く瞬間を待ち望み、日増しに春めいて参りました。

この穏やかな日に旅立ちの日を迎えられる卒業生の皆様に、在校生を代表し、心からお祝い申し上げます。御卒業おめでとございます。

おそらく卒業生の皆さんはこれまでこの学舎で過ごしてきた三年間を、感慨深い思いで振り返りつつ、一方で新たな生活への展望に胸を躍らせていらつしやることと思います。皆さんがこの壱岐高校で過ごした三年間は一つとして同じものがない、この世界でたった一つだけの時間です。この三年間で皆さんは何を学び、何を思い、何を手に入れたのでしょうか。一人一人の経験は違っても、確実に皆さんがこれから社会に羽ばたくための力を、ここ喜応台上の青春の日々の中で手に入れたはずです。

今年度、本校は創立百周年を迎えました。その節目の年に花を添えるべく、どの部活動も例年以上に切磋琢磨し、互いを高めあっていました。また「煌雪祭」では、皆さんの姿を見て感じたことが多くありました。体育祭では、進路実現への正念場とも言える夏休みに、学業と準備とを両立し、どちらも懸命に取り組まれ、練習の際には素晴らしいリーダーシップを発揮されました。しかし、その陰にはより良いものを追求する思いからの様々な葛藤や衝突があったと思います。けれども、皆さんは決して私たちの前で弱音を吐かず、常に明るく一生懸命に指導して下さいました。その他にも記念式典や駅伝大会などの数多くの行事があり、その中で皆さんと過ごしてきましたが、それらにおいて皆さんは常に私たちの前に立ち、時には面と向かって、時には背中様々なことを教えて下さいました。私たちはそんな皆さんを尊敬し、誇りに思っています。皆さんが記していった壱岐高校100枚目のページ、私たちはそれを受け継いで、101枚目のページを記していきます。

私は野球部に所属しており、日々の練習や様々な試合で先輩方と多くの時を過ごしてきましたが、その中でどうしても脳裏から離れない事があります。昨年の夏、三年生にとっては最後の大会。その中で私はレギュラーとして出場していました。二回戦、私は打席に四度立ったものの、思うような結果を残すことができませんでした。試合の結果は惜しくも敗退。「あの時自分が打つていれば…」自責の念で胸がいっぱいになり、涙が止めどなく流れました。この試合で引退する三年生に合わせる顔が無いと思いました。しかし、先輩方はそんな自分に声を掛けてくださり、共に涙を流しながら励まして下さいました。その時の先輩方の温かい眼、肩に置かれたその手の感触…今でも鮮明に覚えています。その時に、託された先輩方の想いを私は忘れることはありません。先輩方の壱岐高校野球部としての誇りと情熱、そして「粘り強さ」という伝統。それらを胸に刻んで私は今もグラウンドに立っています。

卒業生の皆さんはいま、社会という荒波を前にしてもその熱い心に夢や目標を持っていてと思います。それを是非、追い続けてください。夢は決して逃げることはありません。夢が叶わないのはその人が夢から逃げてしまうからなのだとよく言われます。どんな困難があっても諦めず夢を追い続けてください。私達はその後ろ姿に励まされるのです。

私の好きな言葉をここで皆さんに紹介したいと思います。

『四つ葉のクローバーを探すために三つ葉のクローバーを踏みに行くとはいけません。幸せはそんな風を探すものではありません。』

ひとはそれぞれ自分なりの「幸福」があるのだと思います。そしてその目標に向かって皆、ひたすらに努力を重ねていくのです。しかしその過程に於いて、他を顧みない態度であってはならないのだと思います。人は自分の力だけではなく、多くの他者の力を借りて自己実現を図っていくものです。自分の夢を叶えるために、他の人を踏みに行うことだけはしてはならない。この事を私はこの言葉から学びました。

先行き不透明な現代社会の荒波に漕ぎ出そうとする卒業生の皆様にとって、明日からの日々は不安でもあり、また、まだ見ぬ未知の世界に出会う楽しみに充ちたものだと思います。どうか自分の進む方向に迷ったときは喜応台上の学舎の姿を思い出してください。いつでも学舎は温かく皆さんを見守っています。100年の伝統は常に皆さんと共にあります。そして隣に座る同級生との友情は、いつまでも絶えることはありません。決して一人ではないのです。

皆さんと共に過ごした思い出を語るにはまだまだ時間が足りず、名残も尽きませんが、別れの時がやって来てしまいました。

今後の皆様の人生が希望に満ちたものであることを心より祈念し、送辞と致します。

平成二十二年三月一日

在校生代表 重井裕亮